

大学論研究の手引き

池 田 進

大学の内実は乏しいというのに、大学論はいま花盛りである。大体にいつて大学はその字の示す如く「大いに学ぶ」ところであって、大学とは何ぞやの論争に明け暮れていいわけではないのだが、大学とは何であり、どの方向に進み行くものかにつき深い反省をなしつつ大いに学ぶこともできるものとすれば、大学論の流行は結構至極なことかも知れない。

今日国際的に考えてみて、大学が当面している問題を列挙してみると、おおよそ以下のようなのが考えられる。すなわち、大学の社会的開放、研究・教育の単位の再構成、高等教育の多様化、産学協同の研究体制の整備、永久教育（社会教育）の分野にまでの大学機能の拡大、大量教育を行なう教養大学の拡充、研究と優秀な学生の養成を任務とする少数の限られた大学の設置、実力本位の大学教師の採用方針、大学の自治能力や学生教育効果の確保のための大学の適正規模、学生参加の問題、運営管理の問題、大学の教育・研究の内容の改善……などであるが、これらの問題はいずれも私たちが前向きの姿勢で取り組まねばならない問題である。

その他の問題、例えば、学部を教育のための分科と研究のための院に分けること、専門分野の孤立化をふせぐための中央研究所の設置、各学科の分離孤立化の防止、研究のための大学や、研究所・大講義室・中央図書館・学寮などを中心とするキャンパス大学の設立……などの新型大学の構想、教授能力の認定の問題・教授内容の改善・学生の個別指導の推進・大学マンモス化の防止などの大学教育の改善・総合研究による全知的統合への努力、管理当局・講師・学生の関係の緊密化、学部・学科・研究所の一体化、教師と大学当局の協同、民主主義理念によるエリート育成の問題、スチューデント・パワーの問題……こうした多種多様な問題にとりまかれた大学の姿を私たちは整理して、大学問題と取り組まねばならぬのであるが、大学自体が複雑極まる巨大組織であるから、大学の批判的考察は多角的になされて総合的に解決されねばならない。

そのための入門として私たちはいかなる大学論の研究書を読まねばならないだろうか。これに答えるのが私に課せられた主要課題なのである。

先ず、以上の諸問題につき、英米の文献解題が中心ではあるが、適当な原典や一応の解決を示唆してくれる書物として、私は、この8月に東京大学出版会から出されたIDE大学研究会編の「世界の大学問題Ⅰ」をすすめたい。それから大学の成立と発展史につき概略的な知識を得るために

島田雄次郎著「ヨーロッパの大学」1964年 至文堂（図＜1—55ヨ1＞、育、養、法）

同 「ヨーロッパ大学史研究」1967年 未来社（図＜1—51ヨ1＞、養〔3部〕、育、農経、林学、倫理、基物研）

をすすめたい。日本の大学については

大久保利謙著「日本の大学」1943年 創元社（図＜1—55ニ1＞、育、農経、林学、法）

清水義弘編著「日本の高等教育」1969年 第一法規（図＜1—50キ123＞、養、育）

大学の理念のあらましを知るためには

高坂正顕著「大学の理念」1961年 創文社（図＜教官文庫＞、養、育）

を読まれるがよい。今日の複雑な大学の問題、状況を理解するために